

東北

古名

軒端梅

世阿弥作

前

ワキ 東国の僧

シテ 里女

後

ワキ 前に同じ

シテ 和泉式部

狂言 里人

地は 京都

季は 初春

「年立ちかへる春なれや。く。花の都に急がん。

「これは東国方より出でたる僧にて候。我いまだ都を見ず候ふほどに。此春おもひたち都にのぼり候。

「春立つや。霞の関を今朝越えて。く。はてはありけり武蔵野を。分け暮らしつゝ跡とほき。山また山の雲を経て。都の空も近づくや。旅までのどけかるらん。く。

「急ぎ候ふ程に。是はゝや都に着きて候。又これな

る梅を見候へば。今を盛と見えて候。いかさま名のなき事は候ふまじ。此あたりの人に尋ねばやと思ひ候。

「シカく。

「さては此梅は和泉式部と申し候ふぞや。暫くながめばやと思ひ候。

「なふくあれなる御僧。其梅を人に御尋ね候へば。何と教へ参らせて候ふぞ。

ワキ詞

「さん候人に尋ねて候へば。和泉式部とこそ教へ候ひつれ。

シテ

「いやさやうにはいふべからず。梅の名は好文木。又は鶯宿梅など、こそ申すべけれ。知らぬ人の申せばとて用ひ給ふべからず。此寺いまだ上東門院の御時。和泉式部此梅を植ゑおき。軒端の梅と名づけつゝ。目がれせずながめ給ひしとなり。かほどに妙なる花の縁に。御経をも読誦し給はゞ。逆

縁の御利益ともなるべきなり。是こそ和泉式部の植ゑ給ひし軒端の梅にて候へ。

ワキ

「さては和泉式部の植ゑ給ひし軒端の梅にて候ひけるぞや。又あの方丈は。和泉式部の御休所にて候ふか。

シテ

「中々の事、和泉式部のふしとなりしを。作りもかへず其まゝにて。今に絶えせぬ詠めぞかし。

ワキ

「ふしぎやさては古への。名を残しおく形見とて。

シテ「花も主を慕ふかと。年々色香もいやましに。

ワキ「さもみやびたる御気色。

シテ「猶もむかしを。

ワキ「思ふかと。

地「年月を。古き軒端の梅の花。く。あるじを知

れば久方の。天ぎる雪のなべて世に。聞えたる名
残かや。和泉式部の花ごゝろ。

ロンギ地「げにや古へを。聞くにつけても思ひでの。春や昔

の春ならぬ。我身ひとりぞ心なき。

シテ「ひとりとも。いさ白雪の古事を。誰に問はまし道

芝の。露の世になけれども。此花に住むものを。

地「そも此花に住むぞとは。とぶさに散るか花鳥の。

シテ「同じ道にと帰るさの。

地「先だつ跡か。

シテ「花の陰に。

地「やすらふと見えしまゝに。我こそ花の主よと。夕

ぐれなるの花の陰に。木がくれて見えざりき。木
がくれて見えずなりにけり。(中入)

ワキ歌

「夜もすがら。軒端の梅の陰に居て。く。花も妙
なる法の道。迷はぬ月の夜と共に。此御経を読誦
する。く。

後ジテ

「あらありがたの御経やな。あらありがたの御経や
な。唯今読誦し給ふは譬喩品よなふ。思ひ出でた
り閻浮のありさま。此寺いまだ上東門院の御時。

御堂の関白この門前を通り給ひしが。御車の内に
て法華経の譬喩品を高らかに読み給ひしを。式部
この門の内にて聞き。門の外法の車の音きけば。
我も火宅を出でにけるかなと。かやうによみし事。
今の折から思ひ出でられて候ふぞや。

ワキ詞

「げにく。此歌は。和泉式部の詠歌ぞと。田舎まで
も聞き及びしなり。さては詠歌の心の如く。火宅
をばはや出で給へりや。

シテ「中々の事火宅は出でぬさりながら。よみおく歌舞
の菩薩と為りて。

ワキ「なほ此寺に澄む月の。

シテ「出づるは火宅。

ワキ「いまぞ。

シテ「すでに。

地「三界無安の内を去りて。三つの車に法の道。すは
や火宅の門を今ぞ。和泉式部は成等。正覚を得る

ぞ有難き。

地クリ「それ和歌といつば。発心説法の妙文たり。たま

く後世に知らるゝ者はたゞ。和歌の友なりと。

貫之もこれを書きたるなり。

シテサシ「かるが故に天地を動かし鬼神を感じしむる事業。

地「神明仏陀の冥感に至る。殊に時ある花の都。雲井
の春の空までも。のどけき心を種として。天道に
かなふ詠吟たり。

クセ
「所は九重の。東北の霊地にて。王城の鬼門を守り
つゝ。悪魔を払ふ雲水の。水上は山陰の鴨河や。
すゑ白河の波風も。いさぎよき響きは。常楽の縁
をなすとかや。庭には池水をたゝへつゝ。鳥は宿す
池中の樹。僧は敲く月下の門。出で入る人跡かず
くの。袖をつらね裳裾を染めて。色めく有様は。
げにく花の都なり。

シテ
「見仏聞法のかずく。

地
「順逆の縁はいやましに。日夜朝暮に怠らず。九夏
三伏の夏たけて。秋来にけりと驚かす。澗底の松
の風。一声の秋を催して。上求菩提の機を見せ。
池水にうつる月影は。下化衆生の相を得たり。東
北陰陽の。時節もげにと知られたり。春の夜の。

(序の舞)

シテワカ
「春の夜の。闇はあやなし梅の花。

地
「色こそ見えね香やは隠るゝ。香やは隠るゝ。く。

シテ「げにや色に染み香にめでし昔を。」

地「よしなや今更に。思ひ出づれば我ながらなつかしく。恋しき涙を遠近人に。洩らさんも恥かし。いとま申さん。」

シテ「これまでぞ花は根に。」

地「今は是までぞ花は根に。鳥は旧巢に帰るぞとて。方丈のともし火を。火宅とや猶人は見ん。こゝこそ花の台に。和泉式部がふしどよとて。方丈の室

に入ると見えし。夢はさめにけり。見し夢はさめて失せにけり。